

宵の新宿

大森 海太

七月のある日、代々木で書こう会のあと、十人くらいが残っていつもの店で歓談。適当に盛り上がったところでお開きとなり、皆と別れてひとりぶらぶら、新宿南口の交差点を渡って西口のほうへ向かう。

七時を過ぎているのに空はまだ明るい。昼間の熱気が残る中、若い人たちで通りはあふれている。普通の日本人のほか、金髪短パンのお姐さんと入れ墨大男のカップル、東南アジア系とおぼしき一行、黒人の親子連れなどさまざまだ。道端では若い男がギター片手に歌っている。少し先では超ミニスカート女の子が三人、跳ねて踊りながら楽しそうに合唱しているのだが、演歌じゃないのでよく分からない。

宵の新宿、でもまだこれは序の口だ。夜が更けるにしたがって歓楽街の喧騒が増し、翌朝まで続くのだろう。早朝の小田急線では朝帰りの連中をよく見かける。

学生のころ、小学校時代の悪友Sに連れられて新宿で飲んだことがある。Sは餓鬼のころからマセていて、あのとときもさんざん悪ぶって何軒もハシゴをしたあげく、結局朝まで付き合わされて、あとから親にずいぶん叱られた。そのSも数年前のクラス会では少しの酒で酔いつぶれ、最近では体調を崩して家にこもっているらしい。

大学の運動部で一緒だったAはその後某テレビ局に就職したが、職業柄昼夜の区別がなく、これまた新宿の彼の馴染みのバーで飲むと、帰ろうとしないので困ったことが何度かある。Aは退職後、信州の山小屋でひとり暮らしをしていたので、たまに仲間と慰問に行って夜遅くまで飲んだりしたが、昨年死んでしまった。

若者たちでござったがえす宵の新宿に、年寄りの姿は見あたらない。暗くなると酒場に灯がともし、歌声がひびき、人通りは絶えることがないのだろう。昔はこういうところでもよく飲んだが、もはや選交代。五時から飲みの爺さんは夜本番の新宿にはお呼びでない。おとなしく電車に乗って無事帰宅、ひと風呂浴びてボタンキュー。マ、それはそれではないのかな。